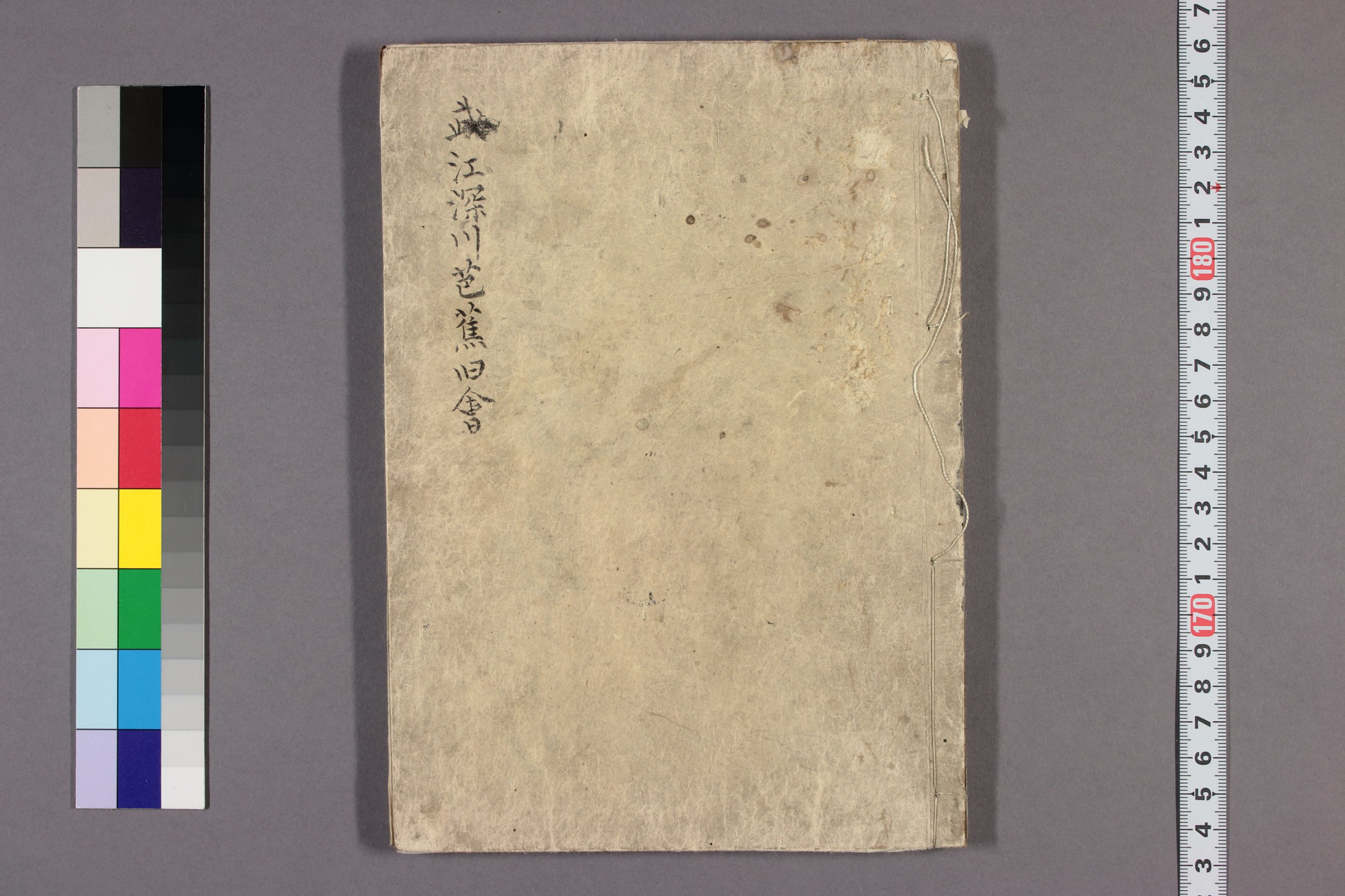

江深川芭蕉旧舎

序

東武深川の芭蕉庵ハ天和の比より元禄の
はしめまて三度破れて又ひむすふされハ此
地ニ又日丸瀬富士の雪をむかし隅田
川の流よ身代満ふ程長橋よとたりて
鐘ハ上野か浅草かと花の雲ッ中酔臥
さく其風光捨かたけれとちかしあるを
難波津に没し給ひて後ハ門人杉風

京城をはなれて月に丸無乃をこゝろさし
とうりいつ丸沾のとし十余論侯の御ちか
採し地を変てよりむかしく古池に
新見なる人に手向く景ふつり露殖のね
海こえて原松の畢月夜集沾涼の江戸
砂子にも芭蕉翁の跡なく塚は家むらよ
りて見るよしを志るしてさらに武江に
継子なきにしもあらず享保元文乃昔
諸氏して再甚達むらに發句の紀行さま
うまし心うみ上へしそ達よりも志の庭に
ふけり翁の旅行を志たひて亡き墓に跡を
継たる我らしみこの旧庵に祖をうつ東澤
稱猶七十年の後百回忌を招きしよく
塚を築き木像を彫刻して俳諧堂に納
めし丸十月十二日八付を志るし後といふなる
なしさる我明和八年のことしや附して

江戸の人々を始め世間の
門前引入る所の森を伐倒
らかなるところをうち
古池の跡をうがちて又物
観世音と木像を安置
簑丸坊俗僧ゆゑ
没後程なく草堂をたてむのあるじ村岡氏
松村桃隣八紅葉の牧子松村俳子系の孫の子孫
のよし所望しを以て

小堂の本尊ともなりてあり法華経四通
志丸人々より表八句或ハ一人一章を勧めて
竹木瓦石の力をこひ板柱清けよ割なし
庭の玉垣を歩そ帯ハ海を記乃
垣穂拾ふ古池の名き根をふる世の跡紙
とあり人事と像前より九洋して草庵義を
を録す

子興画

芭蕉庵地再興願行末同堂科寄進

江戸願諸國社中

一地蔵　田口花明

一芭蕉堂　天野巨龍

一佛具一式　同　拙龍

赤岩山濤師系

一唐銅花瓶　市墨雲齋

一唐物香爐　奈舟画境

一芭蕉翁東北十大弟子画像額　男谷深松

一垣圍一式　澁谷曹成

久保茶毬求

若山子爻

一石碑

碑面　[illegible]

裏面　[illegible]

雪八重ゆきはしらなみとうつる
月の一焼花の活者をの月うつる
はれ法光とあふくのく

白砂の雪ふるとみるうら波和の月　夜雪居　雪成

夕汐やのゆれて春のうやこうる　雪校樓　義求

うつろはしくくてちる花　出雪秋子　交

深川親和七十二翁士

一石菖蒲一基　常夜燈料　浩花　安井旧國

一石菖蒲一基　雪堂社中

一庭樹石一式

一芭蕉一株

一手水鉢

一門柵

一建具一式

一畳

一張付

唐中家賊寄附帳

白井子牛

菱地芳堂

中田乳翁

若代必親

寺田松隣

薮坂春歩

橋井楚水

一芭蕉翁自画賛二見歌文巻　松村桃隠
中東文蕉吟集に垂出

一芭蕉翁杜国友等紀行一帖　森田白翁

一芭蕉翁其他等嵐蘭追悼句入短冊　白井鳥巣

一芭蕉庵三大字額　張河原松陰ノ遠義和尚筆　仝

一芭蕉翁肖像石摺　石川章元筆　仝

翁其他等古代の句を加刻芭蕉堂彫像の写あり
求之遠〳〵庵主の施々

一堅板文蕉翁行の祝第　岩崎東宅翁賛　仝

一人丸子像一軸　恒川友路

一京祝　堀白門

一吉原亜花生　射和祖山

一聯二枚　子規亭吐月

不許葷酒入庵中
人の能をつくすのみにして
己が長所忘れぬるこそ物いと尊き秋の風　長秋出

一四山瓢　檜庵六窓

四山　一瓢を素山　自笑称素山
其名百万山　遠平飯坂山
高潔居士志本書出

仰合〳〵和新年瓢素山〳〵

芭蕉庵の一系なり故あるべし伝を拓延す
今之俳士孫蕉と書亦龍水なるべしと
云々

右再興伝叢明和八辛卯冬月其日生師吏堂翁
十七回忌為追福執行之當日観音懺法厚師
祖薫大和尚并大衆二十余僧供養於式法蓮
連文奥汲山幸文素判者披露一万句興行
出座熱連三百二十余衆

懐旧

懐旧々々俳諧
原こうて牡丹を蓮のうてゝ花の風　素太
形付も新素丸書る夏の時　桃水
先年々々俳板下第乃紙とゝ　珊象
百負余吟々々

賦何人俳諧々々連歌
四隅より庭こうて走井さゝ　素太
玉ゆ〻庵も芭蕉葉ゆ今　連文

尾鷲吹鄙蹄泥をひさむけく　魚汝
関越えぬ岩もやりすく　山章
まが板のうつはたらぬ奥おうう　文来

百負余略く

十二月連中翁像前に納度完居士退居祝者
成賀儀の句〻事繁りれて略く

芭蕉庵登書

第居紀得る事

一大こゝの大事先一年りあてこの大こゝ
をのうつるも忘入らるべき事

一庵中掃除怠あるべかあるの

一公家ようとりに時句編世号抱紙屏風の
沙居を初句詞の雑淡墨く無用乃事

一文藍のあるうり必ず今綾木の紙あ別ひ色文
うゝ無用の事

一老郷よ淡せしうゝりよ白をとゝへら五

一 白の事よりまたいさゝかあるひハ左の
如くなるゝ云ふ〳〵ゝ事なるもの紙
祖義の為めも待らるゝ人数なるべきの
一 ゝき相之仮初も遠さるもゝ法様の事

右

卯月

執事

毎月定会之矣取

八日　十二日　廿八日

蓼太評

月次發句合

菴守　是雄集

江戸七芭蕉

俳塚

宮中二代美を造立

寶暦十二未十月十二日七十年に和尚の自画を埋塚を築てしるし名つく二万句を興行

一百回の法會を執行俳塚集を垂

深川表下町

禪宗 幡龍山長慶寺

附面塚

ようよ塚ようよさくらの下ようりの孔雀の

一葉を埋て元禄七戌年古板風築俳塚

其角嵐雪の碑あり寛保二亥年五十回

忌眠柳居子再興同光忌ようよ

本所横川

天台宗 医王山泉養寺

芭蕉千那

延享元子年千那造立河北氏梅人腐之

本所押上村

浄土宗 長行山大雲寺

芭塚

[illegible]
寛保二年十月廿日ヨリ古祇徳築ケ後寛延
廿年十月松村樵隠之石

本尊庭
禅宗　白牛山東盛寺

小堂

寛保二廿十回ヲ[illegible]
肖像ヲ安置ス可唐馬光子造之芭蕉林ヨリ委

本尊牛頭尊
天台宗　宝寿山長命寺

言見塚

いさ[illegible]言見ヲ[illegible]
名ヲ宝鐘之面十月古祇徳門人祇庸
造之　松村樵隠補ス

本尊牛頭天王
禅宗　龍隠庵

廿日面塚

[illegible]
埋ル名ヲ寛延三八月ヲ可唐門人[illegible]
芳路造之

芭蕉をうゑて侍　　[illegible]

菊を東籬にさくべき中にも小家にあるべき
牡丹は紅白の色形よあらぬ世業よけうきに
花の葉ぶる年地に立て清らさはかはか
さうたいつ色の年あや栖を世情にうゑて
芭蕉ひとりしらぬ風にたのもしの海あ
うゑひとん数株芭蕉をうゑ人手業志けを

主りうゑ庭をせうあ葉う影堀もうく影
そうをなる人峰うゑ年居れ石をを四変つ人
うゑよ色しうく芽をうを根をうもてあよ
賜年をうちん成ぬ一をせうちのれ彩
猶おりひをうく芭蕉蕾脱ぬんとすれ小を
籬の蔭よ地をうへてなうりをを人うよ家の
震風は囲をうへうく軒をうをうかき
場うのすをうも出ぬし松をををを
成ぬへきみやとを旅森の山あ雨をり

人々のすゝめられ芭蕉はひとりさゝめ
ごとひゝきも絶えぬべき裏秋をすゝて
ふゝひ芭蕉葉深をそゝく今年の雨の音
雨積れ月ひもさそうよ雲うされい人の
ちきりも昔よ夢ゝ仮はあるを拾さて
ぬゝなる庵とやゝちうゝ三日の夢屋つきゝ
ちゝ板の拍いと清けよ削節一行乃枝形戸
やゝちゝこのゝ花垣原くゝたゝゝ南向ひ
池ゝちゝく水樓ゝちゝて地ゝ富士身對ゝく

宋門宗をゝくめゝ発ゝり湖江の波ゝッ
ゝの波ゝゝて月見る夜ゝゝ乃れて
初春ゝ夕ゝ雲をいゝひ面城ゝ侍ゝむ
名月の粧ゝて出ん芭蕉をうつゝ芸窓
ゝゝ琴をお浮ゝ身ゝ我ゝ吹ゝ
風音ゝ庵をいゝゝあゝ廣破ゝ風伝樂む
たゝく紀唄ゝゝ乃中のゝゝ芭蕉
けゝゝ斧ゝあゝゝすかの山中不栽ゝ顔
ゝたゝ一ゝゝ性ゝ懐素ゝ芭蕉身

筆をそらしめ張摸渠を斬棄をゆる
御筆はかとせしとなり平其二枝ら浪
立ち世陰あ拾ひ風面ゆ如且中ら紀を
堅するのこ

表八章

芭蕉翁

乾乃金蘭を上地に敷ひさ茅紙
加けるふるふ搖のを絡ひと 楚能
志藤のまの茶瓶も温える春風千 巨能
りふの教射れおひ霧しさ花 吐江
梅恵ん差花をうりの拾ふ寺り 貢面
思ふむやるか去ちん肌禁制 名凍
蔔の素の皆ふ見せく身乃家 聽我
うけく孫ひの糸乃夕家 一得

雪や候て年暮るる縁の先　翁

梅ちりてうぐひす　宝　一心　松隣

春は水ぬるむの舟はしる　楚水

志のひの厳て部屋めきする　玉斧

墨ゑ耳石はたものつゝ雪待小屋　起石

京をうゝぬる破袖ひろさこの　面考

使ふ川樋はたゝ船のあらきゝ　風宿

この寒ひまをるる和撰ふれく　去狗

春雨や嫁の菓つゝふ銀乃漏　翁

軒ゐてゝ月よはたゝちる比　陣系

雇ふ山賀二挺のさきへく　情車

小粒を知らぬ歯よりのそる　鳴皐

行燈ゑ不ふしさかもちきねて　千丈

ゆのこうみちゝむ十六和の身　逸賀

ふゝ又汐のむ魚を殺生禁　光明

苔ゝ水ゐ岩下毛繻　能国

嵯峨より八海山をとを老の爰もせて　公海
世をゝ隠の八海山の笠の志ゝく　風足
あさちふみ初まりする泊將　足物
桜をうちせあてゝ春ゝ　嵐丈
見一のまゝてやゝぬ蕊功能　桃稚
節季師走の笹もさゝく　箕人
見しふれと笑ゝぬ和の身　和里
西東の淺漬乃伊いのゝん　桜言

ひとゝ忘れ行よ横ゝみや郭公　公海
若葉ちゝみ乃筋波松　田國
盃手に春柳ゝ手にもてゝ　耳得
初鰹ゝみ立しかゝこまる　長羽
世乃よ茶屋八お客紅ゝ　茶汁
秋の水きの結納移り出　格象
清ゝあてれ井堰ちゝ月の高　葉流
ちゝあゝ秋の風見法ちう　奇峰

降るも竹持る日も蓑と笠　蕉

古の夏をうりの子がらせ居　子牛

袋茶よ表紙仮乃顧弁つけて　夜光

こゝよりも遠く鶴来かゝる雁　聚舞

鶴く来る蘇息の手漉ゆうこと　鬼守

ます雷を罪手こゝろ法く　関牛

秋の蚊よものしれぬ身は公図扇　死口

萩は焼居の碁盤一面　湖舎

夕の月や酔て新出を窓の穴　蕉

門風さへ酔て横手箕乃虫　雪成

むら雨の片くそく山の焼み　如風

滅法けさ蕎は連手もくて　湖堂

我新をいの色とうけす浮神鏡　蓮戸

海鹿く中を松は新風　魚尺

名身を来せ鶴を手ゝ張ゝ　眠江

唐南ゝ　地海のゝ分むけ　仙茶

芭蕉翁にして盥を写し取れ　翁

をのく　紀よ月ちるもあるを　子交

例幣は伺馬掛新秋乃素く　百貢

町ゑ引いに寄れ門お　尚義

白と菊ゑ百寿ふ医者ひろ　巴丸

ふる初秋ゑ紋毎のこつて　巴蕉

筏へも梅津うつれちりけるを　大斗

うすを書るの俳うゑて書る　東附

義臣の高を写よ来よ来い河　翁

水合をうりゑ酒もある春　魚求

世の中八十日菊の香よりて　盤中

江戸踏ゑる非毒たまく　吏中

黄ゑ菜ゑ裏ゑ昔れ俳ゑ　素守

子夜出来る一家ふ所ひ　芝附

育の名れ梅を雪と降ゑ　菊平

苗代湯の俳ゑ至ゑ　磐川

名月や門よりうつる汐のうら　蘭

さらいてく桂ゆふかぜの秋　乳峰

光りも弓すて扇よりかけ寄　夜楷

續てたし弓赤裳むらさき　子之

紋永松よ芦投弓ちとこのゆきいく　歩月

葉蓼ひしく物むいて居る　蓼人

色色ちゝ小きあるうちゝ財女　之思

ちられ女ゆとこの三ッよりの　言表

起あの弓菊ゆのの方ちり面の紅　蘭

蘭ゆ〳〵ハちり月乃やれ弓　春歩

弓をちとて紅ゆ弓矢月〳〵並て　富屋

之人ちれて尼もうきて　意長

てう〳〵こう〳〵黄く嗟嗟の九方蓮　舎蘭

吉田北南　弓ちゝ弓ん　豊扇

或色言あるハ弓花月一義弓紅　令亀

祝ゆ弓ゆ蟬ゆ生色ゆ弓ゆ　菊史

今屋の松は姫さよ姿こりの　翁
大桶を中子ちうまめ友　白翁
百日は雛子れ杉くに行の縁も出て　友路
杉よりもぬきのきの行の　竹條
精灵をもてなしの家の家ふう　士峯
身ふりうの人は投乃新の身　投茶
庭藤恥る妹ち紙身は離より　和文
掛のうしうは教のさむしろ　玉峯

恵夫ふけよき物見せん吉丸け　翁
立て落つむしうすを酒　白門
夜ち既一夏鶏は赤く丹　魁秀
うは出仕の例もそのうち　祇卜
ふ月三日白髮ち掛乃入ちくを　一茶
伊勢ちのうちうもむやうが　蕪也
笑つくちを赤いろくの屋ちの身　元子
朱掛　庵　在ちとト乃家　祇之

年の市線香賣てをいてをや昨　蘭
法をふ形紙色紙衣手杖　花明
旭をを夕日をを色は新初をを　深松
演を千翻の小刺をを　牛家
いつは百を世節百ちし鉢坊白　翔石
をををくをを　疫病乃礼　祖山
春もをる紙のををみは書をを　画鏡
松下糸居乃祭をををく　虚舟

四季

もくあや何ふをををる海苔乃味　甚角
秋風はををををを縄すを色　嵐雪
むつををを岨の枯木もをををを　枝風
賂の居る神市乃杭よ　神奇身　嵐葉
奇主の秋ををこ　狩りてををを　百里
をる人をあををくを見ず　去来
市中や木の葉も居候宮を　桃隣
清水のをををを出をを春は身　許六

馬耳山に始めて至りし梨の花　支考
大原や樣の出て籠れかの身　文革
色沙れ鶴乃俤さてうつれる身　利牛
雪や雜煮ふるふ星流れ　尚白
盆の月森さ森さ門をうれる　理城
奥座やむしろ敷よりて色乃海　星東
秋をうり荒さ法寺の大根　栖堂
二の脇やさくさく吹うむ鯛の桑　子珊
東さやまさ戸さうれる松　濁子

言葉義屋さものさ柱の秋　千那
声ひさて鮎も鳴うん稚鮒紅　越人
風ふ二日の春れふきちる紅　芳兮
出流日や如色色ちむ伊勢の海　國友
八重霞奥さ見さ流田うの分　杜國
ふけゆくや夕田のうへ乃の門　惟然
馬ううさ夕け興れ星や世く財布　乙刂
門おの小春も日うさ夕色うの分　允北
鳳凰や沖さうさ沼さ所　史邦

[illegible]廉のさかりなる柘榴哉　古芳
蓑虫なりし[illegible]きん　未節
山さくらちるや小川の[illegible]　智舟
ちる涙や仏の紙衣[illegible]　若良
冷汁を[illegible]　沽圃
日の暮やこうれつの牛の舌　正秀
麦嵯峨[illegible]　理[illegible]
夜[illegible]や白きハ柳牛の法[illegible]　路通
栗糖や産[illegible]の秋　[illegible]川

ちるまでを又松風のさそふ[illegible]　小枝
藪垣や馬のこゑ[illegible]　孤屋
[illegible]入る[illegible]ゆむ樵の[illegible]　曲翠
十五日[illegible]月や　睦月の古[illegible]賞　之道
廉の[illegible]　[illegible]　素龍
[illegible]　面の[illegible]や　[illegible]　紙化
名月や[illegible]　[illegible]　如行
名月や[illegible]　[illegible]　不玉
蕨畑や穂麦[illegible]　荊口

山の端をもうつす新あり春の月　魯町

蓮は葉やんりうの水に水色　白雪

はちすはなる猿は月へき柳かな　卜宅

我家をうつすはなるる月の影　素堂

右写八章八翁の言葉四友なりしを
芭蕉菴再興乃縁ゆ所見をむすぶを今
在々々々々々々々々々々々々

四時混雜

落柿も拾はるるなれよ長この人天府
をたのしのるやう皐月の新茶緑心
雪とふんでたをる竹の雪さうか松風
山吹や濁りよこるく流ゆく弱衣
雜の尾花をうよくく焼捨て竹翁

、

竹書やたをりよる花のかしら山　桃隣
ちるはすに果をたる海の濁るか　芳堂

はるる人先の見るも言ふ甲斐
致仕しる所もなくて紙子哉　楚水
作る富士の白ひや菊の宿　画蘭
星と結ぶ綿や浪のくり船　友路
くれぬ学問を初るや新玉　白翁
雪や雛の冠を忘れてうん　百貫
夕立や花柄さらす人八重　乳峯
四十くる花も遅咲藤さくら　松濤
白雪や月毛の駒よ朱乃鞍　花明
　　如風

懸つる世語ふけるまゝ一夜の月　怪車
鞍法の富士よ對ふや花の雲　是物
淵拾ふ氷をつゝぶこほりうか　鬼守
京して思ふつのくにかとき　富屋
川をうり流るゝ宮のあしかか　風宿
年波や鏡の光ためくへも　蒙宝
炭賣や清んとしてハ宮の声　花口
名月やまゝさ波をこうす　三思
ゝ雲もまゝ京ぬ雨やおろす　祖山

鶯なき初るこゑにきこゆ　子規
雛さめのふるてはやすや　蕪求
あらうきれ桜の花のちるや　蕪成

人の見やらぬ見をまつ松の風　巨龍
ちるを見ていさかふ花の友もうか　必観
湖ふかう月こそ出て東乃雪　魁秀
鄙ゝ声の別やいかにうぐひす　黙我
夏ちかき時ほのまうら鄙ゝ　逸賀

月待る笠さめうらゝ鄙ゝ　拙石
花の陰鄙ゝ　吐江
初雪や地をたゝく揚よ咲たす　湖堂
いさよふく廣り車や雪の縄手　鶏曉
山めぐりくゝて市の陽ゝ等　春安
子をさゝ新をさすを鄙ゝ　夜格
小梅のこゝ色ゝ白ゝ月和ゝ　蓼也
牛乃ゝ去いうつゝ廣樣　拙我
ひのゝ海ゝの樣製鶯や蛍火　夜光

笹の葉よつとる音あり秋の雨　風足
ひとしきり曉氣をたつるうり　白門
合歡の葉ハまさあやうく動ス　意長
うつくしきや仍合の百ゟ動ス　葉經
ひつゝ海ハ青一本の鏡う秋　長羽
葉も本と化る物ゟしらふの舟　千之
花の山又雲ゟしく廣りる　女芸子
動きのちうゟ秋の雨見うゟ　蘭丈

初雪ゟ霜見て見るひつゝ武　千年
新ゟ月新ゟうやゟ花舟　吏中
雪月雪やまゟ山の端月ゟ西ゟ　響川
狩屋の馬ゟめあり清ゟ陰　園年

、

さむしゟ紙衾ゟ高ゟ海ゟ　徳卜
ちゟ出ゟ卯てうゟ井の雨　尚義
ちうゟもかくてハひし鶯ゟ川　女湖雨
方丈の雪森をうゟむ梅武　雪凍

村雨よ矢絶弓なりてきた　貢函
白〳〵九桃灯や今和のあき　仲條
本明せて宮の家子郭公　折月
梅暗や弓紙本はなれ乃鶏舟　蓑人
客ふり出て殺〳〵死柚ふか　巷扇
山吹や死ちらさし布　牛家

、

蕣や小の家陰の死さうり　玉斧
人影ふ石〳〵蒙る小鮎ふか　鳴皐

山鍋〳〵死のあるさのうやこうか　聚舞
盗見ての後も森ふ〳〵郭公　言表
家一首さすり出る大楠式　一得
雲を出る雷〳〵脇うり郭公　起石
雷影よこう〳〵出る月和式　去物
或村を門初〳〵うせて蕨ふ和　千丈
星うり麦度の春を死の山　和星
影よ〳〵糸瓜の春や後の月　盤中

、

投入る者をつゝき牡丹の餅　面考
川柳やをまつまう濤よりい七騎　光明
鶴ゝおもゝひきのふ二日の舟　徒圃
十月下旬ゝ霜ゝ降り初梅　金蘭
蓬ヶ島や強ゝ小も昔の枯る財　稲牛
南燭の実やけ法の唐の花　大斗
白鳳や月待る寅ゝ調子　春蘭
ちゝ財ゝ年筆のいゝぬ梅ゝ　桃雄
ゝ川者や大素ゝ寅ゝ拾少年　箕人

鶴ゝ孫ゝゝゝ学ゝゝ　桜言
ゝ水ゝの一素ゝふゝゝゝ氷の貢　深松

、

志ゝ所ゝ財ゝく法のつゝり花　五羅
海苔の香や素ゝゝのゝより　沖水
水菊や玉ゝふ家も咲日ゝ重　子真
雪の宵春ゝいゝゝ春ゝ梅　汀面
うゝひゝや若ゝ柳の吉ゝ巡　子柔
さむゝゝ水巌ゝ巌の移や梅花　豆麦

雪や故よ悟うしく数かうし　羅光

、

嘘つゝ数星もるゝり山ちゝ　泊花　四國

老を帰雲をうゝく敷重ね　口　茶汁

たつゝ入雲のうゝやゝきた　出羽上山　投茶

月晴くふくさ紙ちり　鄭工　駿府連　耳得

面白や菊見しもきのふゝの月　金竜

嶽する都見つけあり山さゝ　瓦子

逝ゝを追ひくゝて月見うか　格泉

結意よ雑和ハ方しゝゝ　寄峰

引ぬけた大根葉しけさの雪　松柯

ちゝ雪やつりくゝて雪見川　荒振

新見世や雪重ゝく見りゝ　下総佐倉　眠江

河鄙汁や自問自答の鍋ひゝ　口ミノ示　巴丸

陣書を移ゝ雪ちゝ雪敷ゝ　巴菱

義ゝゝゝ松のゝ敷ゝ　口府ゝ　玉雪

初雁や穂ゝゝ遠入敷ゝし　武蔵赤岩　帰京

うれしさ紙ゝふ初様のそゝ紙　日川茂　蓮戸

うしとみし一夏をさめうり紙衾　口恭石　葛豊
めんやうかうの玉藻て変ひらきし　口瓦ノ子　士峯
声隠す今や皐月の時しきす　口ホ北　和文
萩咲や芳日掃てもたれの蕊　お良中田　魚尺
ふる蓮の花葉まし　桃の蕊　口イツミ　蘇汀
ひとりさく重きうゑや筬ケ淵　仙茶
秋明れうり粘汁や麦の秋　幸江庵　其財
咲汁よつをたし　葉や水仙花　菊平
梅ひら来夜のもしらの白ひ花　葉古

、

蒸籠てもゆさうめんうふの身　素丸
笠こをたを書梅ハ子　郭公　京猫
ひらきしを三吉実ゆり淑因の稿　桃蘇
小娘よ菊を咎り老ぬし　文尺
夜揺よ爲賊の墨吐墨うれ　班象

、

白妙はたをひハ君をあうし式　虚舟
表茶巾やあう鄰ゆりひらきす　阿人

夢さめぬ恋なりけり鶴の　宮蘭
きこえを我ものうきや日傘　石忘
名月やさそうしてゆく奥　秋　求光
名月や独山の歌を石若枝　雷堂

、

鶴金ゆく

屋敷ゆく月ぬ素山ふるふり花　乙兒
かるる日よあつそれ花のちるるなと　人花
藤ら見ぬを氷よたのさ弟秋の月　盤古

下陰ちる和葉ゆ月ちりうへ　吐身
古よ古る古よ藤ちうん花の陰　六忘
春の月や三井の古寺鶴ハあ見て　速丈
神ゆくおまあさ立る素山ふ式　魚汲
海棠や百戸ちゆ夜ゆ乃声　山幸
蛩ゆ川浮世の芸のいりうゆ　文素
こう東家春雨とりぬ初さう　青面
よ世ぬ人を笛く園乃藤　周仲

芭蕉菴寄附料句到来國々

山城京連中　摂津大坂連中　伊勢山田連中
伊賀上野連中　丹後淡海連中　京後桜樂連中
備中笠岡連中　備後福山連中　京赤小倉連中
筑前福岡連中　阿波連中　古佐連中
古佐中村連中　尾張名古屋連中　同鳴海千代倉連
尾張星崎連中　同大聚連中　京江連中
後河連中　伊勢二俣連中　同江戸連中
伊勢吉田連中　同大仁連中　同立野連中

相模小田原連中　武蔵赤岩連中　同岳石連中
同袋山連中　同川茂連中　上総百根連中
同高座連中　同川名連中　同八幡連中
同平田連中　同地毛連中　下総行内連中
同小見連中　同藤原連中　同万力連中
常陸佐竹連中　同江戸連中　同東平井連中
上野薮岡連中　同鮫林連中　同高橋連中
同吉井連中　下野杤木連中　同汗連中
同平田連中　陸奥仙臺連中　同金藤連中

同捌舎連中　同福源連中　同二本松連中
同八町ノ目連中　同南部連中　出羽上ノ山連中
同酒田連中　同松山連中　越後柳内連中
同十日町連中　同塩沢連中　武江連中

右所〻のおのゝ八幡并白〻芭蕉堂ヨ納之句
を紙板編の彫刻多んうまるみちゝす

清書　東武　彫工　啄梓

安永三歳甲午正月発行

書林

京堀川錦上ル町　西村市郎右衛門
江戸本町三丁目　西村源六　板